

日露講和

日本海海戦が日本の勝利に終わった、三日後の五月三十一日、小村外相は、駐米公使にあててアメリカ大統領に講和の斡旋を要請するよう訓令を發した。

アメリカ大統領は償金はロシアの財政状況からは困難であるが、樺太割譲位なら可能性があるだろうと返事したという。

その他に、日本の朝鮮支配について国際的な承認を受けておく問題もあつたが、小村外相を首席全権としてポーツマス講和会議に臨んだ。

以後、八月二十九日まで、十数回の会議が開かれたが、割地と償金問題は、中々解決せず、混乱したが「ロシアが韓国に対する指導権を日本に、旅順・大連の租借権と長春以南の鉄道や付属利権、さらに北緯五十度以南の樺太を割譲・沿海州、カムチャツカに於ける漁業権を認める」というものであつた。

ロシアの支配層は国内に顕在化していた矛盾を解決する事が出来ず。

「血の日曜日」の事件を契機に、ロシア第一革命が勃發した。

わが国においても国力をはるかに超える戦争のために政治的にも国内再編が急務になつて、日比谷の焼き討ち事件となり、ロシアではガボンを率いられた民衆の嘆願は銃火に蹴散らされ、下凶の様に、血を流す革命が、ロシアに於けるツァーリズムの専制支配の打倒を目指す、帝國主義の矛盾が各国で起こり始めた。

